

2022年7月31日(日)／説教者：國分美生

説教：「命の息をいただいて」

聖書：創世記2:4～9

聖書には神の恵みと導きに対する人間の背き、そして、それにもかかわらず、人間と関係してくださる神、人間と共に歩んでくださる神の物語…神が主人公の、神の歴史における、神と人間との物語が描かれています。

神は混沌の中から、光や、陸地や海、植物や動物を呼び出し、神の秩序のもとに世界を創られました。「主なる神は、土のチリで人を形作り、その鼻に命の息を吹き入れられた」。そうして、人間は生きる者となり、人間となったと聖書は言います。神がそのみ手をもって自ら土をこね、まだ命を持たない人間の肉体にじかに触れて、神の命の息をいっぱい吹き込こまれた。神は何と人間を愛し、大切なものとして創造したことでしょうか。

創世記はイスラエルのバビロン捕囚の時代に書かれたと考えられています。バビロニアにも別の創造神話がありました。大きな違いは、バビロニア神話では人間は神々の戦に負けた悪い神の血液から創りだされた者であり、神々に生涯奉仕するためにいると説明されていることです。創世記はそのバビロニアの神話の枠組みを用い、イスラエルの神への信仰告白としてまとめられました。囚われの民イスラエルの「神から命の息を吹き込まれたわれわれである」という信仰告白は、押さえつけられ、奪われ、引き裂かれた、人々の自尊心と人間性を回復させるものであったと思います。

神が私たち人間を、その手をもって創りだし、神の命の息を吹き込んでくださったから、生かされている。その確信がもたらすのは単なる自尊心の回復だけではありません。「私たちは主なる神の御支配のもとに、神と、隣人と関係し共に生きる者とされているのだ」という希望と悔い改めをもって何度も主のもとに、身を低くして立ち返ることを促します。

私たちは毎日の生活の様々な難しい出来事や、心や体の痛み、隣人との分裂・分断を経験しています。地上にはあそこにしわ寄せがあり、ここに破れ目がありといった不条理が満ちています。しかしどんな闇も、嵐も、困難も、私たちから希望を奪うことはできません。私たちは、何度も聖書を読み返し、何度もイエス・キリストと出会い直し、謙遜の内に神の人間との物語を心に留め続けたいと思います。みことばにきき、神の国を祈り求め、行動する力を、わたしたちの内に吹き込まれている、神の命の息からいただき続けていきたいと願います。(國分美生)